



乾癬患者の人生を支える 治療の進化と周囲の理解

乾癬は※炎症性の皮膚疾患です。
悪性の病気ではありませんが、皮膚表面に現れる疾患のため、
見た目から生じる誤解や生活上の支障など、
患者さんの苦勞やストレスは深刻です。
この病氣への理解を深めていただけるよう、
千葉県医師会児島孝行医師にお話を伺いました。



千葉県医師会 児島 孝行 医師

▼ はじまりは、フケ症や湿疹と
勘違いすることも

乾癬は、皮膚の表面に境界のはっきりした赤い発疹が出て（**紅斑**）、盛り上がり（**浸潤・肥厚**）、その表面が銀白色のかさぶた（**鱗屑**）で覆われると、やがてフケのようにポロポロと剥がれ落ちる（**落屑**）、というのが典型的な症状です。（**図1参照**）

そのため、初期の乾癬では、頑固なフケ症や、繰り返して現れる湿疹などと勘違いされる患者さんが多くいらつしやいます。紅斑の形や大きさはさまざまで、症状が進むと、全身に広がることもあります。全身のどこにでもできますが、頭部や髪が生え際、膝、肘、腰まわりなどこすれやすい部位に多くみられ、半数以上の方がかゆみを訴えます。

図1

乾癬の症状の一例



紅斑：皮膚が炎症を起こし、境界のはっきりした赤い発疹が出る
落屑：銀白色の鱗屑がフケのようにはがれ落ちる
鱗屑…角層が正常より厚くなりできるウロコ状の白色片
肥厚：皮膚が厚く盛り上がる

さらに、関節の痛みや腫れ、変形、発熱や倦怠感を訴えるタイプの乾癬もあります。

見た目が気になったり、かゆみや痛みから日常生活に支障が出るなど、患者さんの精神的・身体的ストレスは大きく、QOL（生活の質）が著しく低下してしまつケースも多くみられます。

発症の原因については、まだよくわかっていません。遺伝的な体質があり、それに何らかのきっかけ（外傷、薬剤、風邪

扁桃炎、肥満、糖尿病、ストレス、たばこ、アルコールなど）が加わったことが引き金となつて病氣になったり、病氣が悪化すると言われています。

▼ **タイプや重症度に応じ、
様々な治療法を選択できる時代に**

乾癬は個人差が大きい病氣で、症状や合併症の有無により、大きく5種類に分類されます。（**表1参照**）
最も一般的なタイプは尋常性乾癬と呼ばれ、乾癬全体の約9割を占めています。

治療法は大きく分けると「外用療法」、「光線療法（紫外線療法）」、「内服療法」、「生物学的製剤による治療」の4つがあり、それらを単独または組み合わせで治療します。（**表2参照**）

※ 最近乾癬は皮膚だけではなく、メタボを伴いやすい全身性の炎症性疾患ともとらえられています。

表1：乾癬の種類

尋常性乾癬 じんじょうせいかんせん (乾癬全体の約90%)	最も一般的な乾癬で、患者さんの約9割はこの乾癬。頭を含む全身どこにでも数cm くらいの大さの紅斑が出現し、表面の鱗屑がポロポロとはがれ落ちる。
滴状乾癬 てきじょうかんせん (乾癬全体の約4%)	風邪をひいた後などに、1cm 以下の鱗屑のついた小さな紅斑が体中に多発するもの。子どもや若い人に多い。
乾癬性関節炎 かんせんせいかんせつえん (乾癬全体の4～7%)	皮膚症状に加え、強い関節痛を伴う乾癬。関節リウマチと似た症状を示すため、リウマチを疑って整形外科を受診し、乾癬性関節炎だとわかるケースも。関節が変形すると元に戻らなくなってしまうため、早期治療により生活の質を保つことが重要。
乾癬性紅皮症 かんせんせいこうひしやう (乾癬全体の約1%)	紅斑同士がくっついて拡大し、体中に広がった状態。正常な皮膚の働きが失われるため、皮膚のむくみ（浮腫）が生じ体温調節ができなくなり、倦怠感も生じる。
膿疱性乾癬 のうほうせいかんせん (非常にまれ)	乾癬特有の紅斑が出た皮膚に、黄色または白色のじくじくした膿をもつ水ぶくれ（膿疱）が多発し、高熱や倦怠感を伴う。乾癬の中では重症であり、日本では難病の一つに指定されている。

◇ 欧米ではたくさんの患者さん（人口の1～3%）がいて一般の人も乾癬を知っており偏見も少ないのですが、日本ではそれほど多くなく、乾癬への知識・理解も十分に得られていないのが現状です。

表2：主な治療法

外用療法（ぬり薬）	・ステロイド外用薬 ・ビタミンD3 外用薬 ・ステロイド外用薬とビタミンD3 外用薬の配合薬
光線療法	・PUVA 療法 ・ナローバンドUVB 療法 ・エキシマライト
内服薬（のみ薬）	・シクロスポリン、ビタミンA 誘導体、アブレミラストなど
生物学的製剤（点滴/注射）	・今までの治療でよくならない患者さん、関節症状がある患者さんが対象です。

* のみ薬は、治療効果は高いのですが、時に副作用が強く起こることがあります。主に症状がひどい時に用いられますが、定期的な検査が必要です。
 * 生物学的製剤の治療は、他の治療法と比べ高額になります。
 * その他、現在も複数の新しい治療薬の臨床試験が行われています。

まず、基本として行われるのは外用療法（ぬり薬）です。主にステロイドとビタミンD₃が使われますが、最近では、ビタミンD₃外用薬が第一選択薬として広く使われており、両者の配合剤もよく用いられています。ビタミンD₃外用薬はステロイド外用薬と比べると、効果が現れるのに少し時間がかかりますが、長期間ぬり続けても皮膚が薄くなるなどの副作用が少ないというメリットがあります。

そして、症状の重い方や生活上の支障が大きい患者さんには、積極的な全身療法として、のみ薬や光線療法が用いられます。さらに、これらの治療法でも十分な効果が得られない場合には、最先端のバイオテクノロジー技術によって生み出された生物学的製剤による新しい治療が行われるようになりました。

生物学的製剤は乾癬に対して有効な治療薬ですが、使用できる方と、治療を受けられる施設が限られているため、この治療を希望する場合は、まず主治医にご相談ください。

乾癬は症状が激しく出たり、良くなったりを繰り返す病気です。症状の変化・推移に応じて、治療法を変えていく必要があります。

間違われやすい病気「疥癬」
 名前が似ていることで間違われることがある「疥癬」。この病気はヒゼンダニ（疥癬虫）が寄生しておこるもので、乾癬とは全く別のものです。近年、老人施設などで集団感染がみられます。



乾癬は症状が激しく出たり、良くなったりを繰り返す病気です。症状の変化・推移に応じて、治療法を変えていく必要があります。

乾癬は症状が激しく出たり、良くなったりを繰り返す病気です。症状の変化・推移に応じて、治療法を変えていく必要があります。

乾癬は症状が激しく出たり、良くなったりを繰り返す病気です。症状の変化・推移に応じて、治療法を変えていく必要があります。

乾癬は症状が激しく出たり、良くなったりを繰り返す病気です。症状の変化・推移に応じて、治療法を変えていく必要があります。